

八文字屋本の出版広告

長友千代治

出版業が成立するのは江戸時代に入ってからである。それは読者がいて、書物に、商品としての価値が生じたことによる。書物が商品になれば、出版本屋は読者対象を広げるためにいろいろと方策を練り、販路を広げる努力をすることになる。それは例えば、書物の広告宣伝となり、あるいは内容を一段と娯楽化させるなどのことによって、より広い範囲の大衆読者を獲得していくことになる。江戸時代の出版がこのような経過をたどって内容が平俗化し、読者層を獲得していつていることは否めない事実である。

江戸時代の書物出版の広告については、拙著『江戸時代の書物と読書』（東京堂出版、平成13）に「本の広告」として、その問題提起をし、娯楽分野の本、役者評判記、延宝二年（一六七四）六月鶴屋喜右衛門刊『役者評判蛸蛭』の巻末に「追付役者通鏡綱目出申候」、同年八月刊『新野郎歌垣』に「後より出るやらうきやらのつえといふ書に詳

しく記すべし」などが、比較的早い時期の出版広告であることを指摘した。雑俳では元禄十五年（一七〇二）閏八月万屋彦太郎刊『俳諧替狂言』に、その刊行の有無は不明ながら、『俳諧鎧武者』のあること、また同年九月柏原屋清右衛門刊『当世俳諧揚梅』に載る『俳諧梓神子』が早い時期の出版広告らしいことを指摘した。

八文字屋八左衛門の出版広告では、元禄十四年二の替りの『けいせいならみやげ』の見返に「近松門左衛門作／けいせい請状／三巻物袋入・丁数三百丁・ゑ入出来」とあること、同年十一月の『新小野栄華車』には『好色一代曾我全部八巻并ニ色口当流三ヶの大事付タリ粋は知る今様姿』について、来春早々出来につき、御求め御一覽していただくことを懇望している。同十五年秋の『壬生秋の念仏』にも『一代曾我』を広告している、この本は御慰みになるよう心を砕いたために、刊行が延引したと断り、追付出来るので、御求めを乞う、と

している。但し、『二代曾我』刊行の有無は不明で、その書名がこの広告で確認されているだけに過ぎない。八文字屋は、このように絵入狂言本など演劇関係書で、その営業の当初からしきりに近刊予告をし、宣伝の上購読を読者に頼んでいるのである。

八文字屋の出版活動は、このような絵入狂言本、役者評判記、浄瑠璃本、番付、演劇考証書をはじめとして、浮世草子、俳諧、地誌、西川筆絵本、雛形ひながたなど広範囲にわたっていて、その営業期間も嘉永年間（一八四八—五三）まで確認されてはいるものの、出版活動の詳細、まして出版年表など整っていないのが現状である。調査の困難さはあるにしても、極めて残念なことであり、今後の大きな課題としなければならぬであろう。

幸い、八文字屋の出版活動の主流となる浮世草子については、長谷川強氏に『浮世草子の研究』（桜楓社、昭和44初版、平成3再版）『浮世草子考証年表——宝永以降』（青裳堂、昭和59）等詳細な研究があり、最近では長谷川強氏を代表にした八文字屋本研究会編『八文字屋本全集』全23巻（汲古書院刊、平成12）が完結している。このようにして、浮世草子についてはその全貌が明らかになったので、浮世草子の出版広告を検討しながら、八文字屋の経営努力を考えてみたいというのが、本稿の目的である。

八文字屋本の浮世草子の案内広告を最初に概括してみると、次のように言えるであろう。

イ 当初、題名と内容を記す簡単な予告に出発していたものが、次第に要領を得た適切な案内広告をするようになること。

ロ 出版の時期を「追付本出し」とか「近日出来」とかしていたものが、出版年月日を明確にするようになること。

ハ 単独一本立ての広告をしていたものが、二本、三本取り合せて、複数本の広告もするようになること。

ニ 既刊本の広告もするようにより、ハと同じ経過をたどるとともに、「蔵版目録」も掲出するようになること。

ホ 同時期、あるいは同年月日付の出版本に、相互に案内広告を出し合うようになること。

ヘ 単なる案内広告から、直接に「御買御求御覽」を喚願するようになること。

ト 続き物を合綴して売り出す方策を案出、その広告もするようになること。

チ 西川筆絵本、役者評判記、その他の本の広告もするようになること。

以上の各項目は、独立するよりも、相互に連関し合うの

であるが、簡単な案内広告から、出版年月日の記載や内容を紹介するなど、要領を得た適切な案内広告に推移しているのである。そこには、娯楽読物が商品として扱われ、またその売り捌かれ方、経営努力が反映していると言ってもよいであろう。以下、項目立てしながら、具体的にみていくことにしたい。

□ 予告として、「追付出し申候、御しらせのため」ここに記すという類の案内広告。

宝永三年（一七〇六）七月吉日八文字屋刊『風流曲三味線』六卷末には次のようにある。

初申上まする

井二好色一代託半主人

当世御伽曾我 八卷

付り風流東鑑

十郎と虎が石より／かたい契約

五郎と口舌の泪は／少将の夜の雨

粹は知今様姿／色里三ヶの秘伝

右之本、追付出し申候、御しらせのため、こゝにしるす

右の案内広告は、次いで宝永七年八月吉日刊『けいせい伝受紙子』巻末にも載せられ、また同書二巻の巻末には西川祐信戯れ絵本の案内広告が次のように載せられている。

▲何れ茂様へ申上まする

大和絵師 系西川祐信一筆の命毛ヲ尽させ、肝門の秘書、珍敷趣

向作り、戯画の板行、追付出来、それゆへ書印候

井二上は色と情の染分楯は思ひの遠山染

風流色雛形 全部五巻

付り睦語尽ぬ百品染に心の移る色好み

御所風の浮世模様

付り圍の結鹿子しめつけた寝巻小袖

町風の当世模様

付り二人寝のぬれ衣透過る肌小袖

曲輪風の仕出模様

付り口舌の抓染中直りは本の白小袖

右の案内広告はまた宝永七年秋序刊『野白内証鑑』四巻末に載せられている。西川祐信戯れ絵本が、同類ながら『野白内証鑑』に出ていることも注意すべきであるが、「秘書珍敷趣向」の出版、即ち好色物の出版が、八文字屋の一つの方向であったことが読み取れる。

□ 予告として、「近日出来申候、御買頼上候」などと記す類の案内広告。□に對して、出版を「近日出来」とし、「御買頼上候」とする所が読者に肉薄した案内広告となっている。

同じく『野白内証鑑』三巻末には『傾城禁短氣』の案内

広告が、第一から第五に至る目録内容を詳しく記す形で、次のように掲出されている。

▲扱皆様にお断申上まする

傾城禁短気、先へ出し申答、評判の本に書のせ候へ共。

少しいはく候ゆへ、此内証鑑、先へ出し申候、此跡へ、追付

来月中、ちがいになく出し候、それゆへ書印候

并ニ男色破邪顯正記

傾城禁短気 全道大全 全部五巻

付リ女色法談之抹書

第一 嶋原寺にて大尽はつめいの床談義

付リ西方女郎方便の涙一ツ滴七十六匁になる事

第二 吉原大尽しばい大尽かなづち論

付リなり平流義の女道にては今の衆生障にならざる事

第三 難波の女郎同坐互に立る小腹問答

付リ女道門あながちに勝て衆道門尻から閉口する事

第四 茶屋ふるや手かけ者色の諸末寺友吟味

付リ巾着山白人寺しりと云新宗を取り立る事

第五 女郎買五重相伝一重紙子

付リ分里一ツ遍上人六十万人色道往生の事

右の本、近日出来申候、御買頼上候

『傾城禁短気』の予告は『傾野情ひな形』『当世御伽曾

我』『傾咲分色仔』にもあり、出版が延引していること

言い訳は宝永七年八月吉日刊『けいせい伝授紙子』二巻末でもしている。ここでは最初の口上を以下のように改めているだけである。即ち、「▲各々様申上ます／傾城禁短気。説法者の散切。段々のびたいひわけの髪。急とき申す付。御しらせのためこゝにするす」と改めていて、以下は同文である。

『傾城禁短気』の出版が延引した理由は不明であるけれども、『傾城禁短気』が従来の八文字屋本とは書型を異にしていることの指摘はできる。その八文字屋本の浮世草子第一作元禄十四年八月吉日刊『けいせい色三味線』の書型は美濃二ツ切本で、この書型は正徳二年（一七一二）正月刊と推定されている『魂胆色遊懐男』の第十作まで続いたが、これが『傾城禁短気』になると、単なる横本の袋綴じではなく、折目を下にして、右方を四眼に綴じた装訂、林望氏が「横綴半紙本」、藤井隆氏が「長帳綴」と呼んでいる書型に変わる。この書型の造本は、八文字屋本には九篇あることが報告されており、造本や書型にも工夫を凝らしていて注目される（前掲拙著「八文字屋本の横本」。新規の工夫、努力のあったことはわかるが、なおまだ方向の定まらない模索期であったことも疑えないであろう。

ここで改めて、曰「追付」と曰「近日」とするもの間に、時期上の相違があるかといえ、必ずしもそうではな

く、その併記も見られる。但し、「御求御覽奉願候」とする方向での案内広告が多くなるのは否めない。次の例は江嶋屋版ながら、正徳二年秋以前刊『忠臣略太平記』一卷末に載るものである。

遊あそ手て管くだし仕やう様でう帳り

付リ諸国色里女郎中間耳ふさぎ

右は勤のひみつをあらはし、女郎衆の耳こすりなれと追付板

行仕候

并ニ大臣女郎隣同志の敵味方風流の智恵くらべ
通とほしよわびととくんだん
俗諸分床軍談

付リ三ヶノ津太夫天神近來身請ぞろへ

全部六卷、近日出来仕候、御求御覽可被下候（上段）

風和国玄宗皇帝

付リ方士が太鼓口形見の貫ざしは水上の庭銭

男不審紙 全部式巻

右之分、追付出来仕候、御求御覽奉願候、以上

八まん町室町西へ入

江嶋屋

市郎左衛門

各々様（下段）

右（上段）のうち、『諸分床軍談』について、正徳三年中刊と推定されている谷村・江嶋屋刊『通俗諸分床軍談』

一卷末には、次の案内広告が出ている。

口上

床軍談、全部拾巻仕かけ候へ共、あまり延引仕候故、先五巻仕立、掛御目申候、御覽可被下候、後五巻、追付出し

申候

床軍談三野色軍談
後之五巻

六之巻 雨夜の忍び路勤七灰水の銜

七之巻 甚平赤裸にて二挺立の船を押

八之巻 半蔵手管文によつて旦那の氣に違

九之巻 大臣深入眸が身を喰紙子の破口

十之巻 栄花の色遊び未社悦びの節季仕舞

右、近日出来仕候間、御求御覽可被下候

これは、最初十巻に仕組んだのであるが、延引したために、前、後に分け、後篇『三野色軍談』を予告したのである。但し、この『三野色軍談』についての出版は確認されていない。江嶋屋が購読者に対して購読を懇願する一方では、制作執筆が順調に進んでいないこともわかるが、これには知られているような家業の衰運もあって、決して安定したものでなかったことが推察できるのである。

既刊書の案内広告をし、あるいは新刊書と既刊書の案内広告を併載して、「御もとめ御覽可被下候」と記す類。既刊の案内広告は、例えば前出の『けいせい伝受紙子』

四卷末に『諸色内証鑑（野白内証鑑）』が次のように出ている。これは先月から本を出しておいたので、御求め、御覧下さいというものである。

▲お断申上ます

井二愛染明王色道秘密愛敬ノ占

諸色内証鑑 五卷

付り野白見通し色の来る間算

右の本は、一切色道の善悪。女の心に、いかやうに思ひるるなど。心の底迄を、考へしる事。ひとへに掌をさすがごとし。占やうは、右の本よくわしく書印あり。則、先月より、本出し置申候間。御もとめ、御覧可被下候

八文字屋八左衛門

各々様

既刊書の案内広告としてもっとも特徴的なものは、「蔵版目録」を掲出することである。出版が大量になって、個々の案内広告が困難になった場合、「蔵版目録」を作って一同に列挙する方法をとるのである。これは巻末にあって、本文とは版式を異にしている。案内広告の対象は、個人よりも本屋、貸本屋向け、と考えられており、それも上方辺の地元よりも、中国、西国、九州辺の本屋、貸本屋向けであると考えられている。この「蔵版目録」はまぎれもない八文字の出版実績といえる。

元文六年（一七四一）正月吉日刊『宇治川藤戸海魁対盃』

巻末には二丁分『四書集註』道春点 十冊 から『本田善光倭丹前 五冊』まで、七十一点を掲出している。延享三年（一七四六）正月吉日刊『勸進能舞台校』、同『曾根崎情鵲』、同四年正月吉日刊『自笑楽日記』の巻末には二丁分『武徳鎌倉日記 十二冊』から『曾根崎情鵲 五冊』まで、百三点を掲出している。延享五年正月吉日刊『十二小町囃袈』には『勸進能舞台』等の墨丁分に『絵本花の鏡』

『絵本福祿寿』を充当していて、百五点を掲出している。これは後年のことであるが、ここからも出版経営の実績が上ってきていることは窺える。

新刊書と既刊書の案内広告は、正徳二年江嶋屋刊と推定されている『商人軍配団』二巻末に次のように出ている。

井傾城かいろん手管の戦ひ

諸分床軍談 全部六巻

付大臣野郎すい同志の敵みかた

真今川当世状 全部十二冊

右二色、替りし趣向をあつめ、来正月下旬より、本出し申候

御求御らん可被下候、以上

各々様（上段）

井 田舎へしいれの女郎恋のげんぎん

并 なさけのやすうり

傾野 旅葛籠 全部五卷

付 田舎しばゐは諸げいの手習

なさけのかけあきない

流風 艶白粉 西川祐信筆 全部三卷

付り女郎手管仕様帳

右、本出しおき申候、御求御らん可被下候、以上（下段）

新刊案内広告『諸分床軍談』は正徳二年冬刊（推定）であり、『今川当世状』は正徳三年正月吉日刊である。既刊案内広告の『旅葛籠』は序に正徳二年初春日とあるが、記には記載がない。新刊、既刊を問わず、「御求御らん可被下候」としているところが新味である。もっともこれは江島屋版である。このことは谷村版においても同様で、あまり変らない。享保三年（一七一八）正月谷村刊『和漢遊女容気』五卷末には次のような案内広告がある。

子息氣質追加

世間娘容気 全部六卷

右の本、出し置申候間、御求め御覧可被下候

西川筆乃海 全部二卷

右は西川祐信、筆力を尽し、珍敷風流絵本出し申候、御求め

御覧可被下候

『世間娘容気』は享保二年八月谷村・江嶋屋刊である。

また元文三年正月吉日菊屋刊『御伽名題紙衣』二卷末には「▲商人世帯形氣 全部六冊 其積作／右之本、先達而出置申候、御求可被下候」、三卷末には「▲鬼一法眼虎之卷 全部七冊 作者其積／一ッ山から飽て追出しの鐘明六つ武蔵が七ッ道具／女に逢てけんくといふ鬼次郎は色のわなに掛らぬ勇士／兄弟の心に節の有尺八独りねやに集籠りの皆鶴姫は恋の初ね／盛り過ても色は替らぬときはの松は三階の大蔵卿へ嫁入」と詳しく内容を紹介しており、さらにこれは次のように、「新敷趣向」ゆえ「御求」下さいとしているのが特色である。

右之本、先達而出置申候、新敷趣向而候、御求可被下候

『商人世帯形氣』は享保二十一年正月吉日、『鬼一法眼虎之卷』は享保十八年正月吉日刊、ともに菊屋版である。

回 「三色共」などと、複数本を「御しらせのため」ここに記すという類の案内広告。

正徳三年二月吉日八文字屋刊『当世御伽曾我後風流鑑』の巻末には次のようにある。

▲扱各々様お断申上まする

井二母はお針に子は色里に

傾野 咲分色仔 全部五卷

付り父は他国に子は野郎屋に

井二軍道の名将色道の酔一世の面影

義経風流鑑 全部十巻

付り主従の縁を結ぶ臣下の名題物出所の根元

井二たはふれの色くらべ床の姿見

好色名取川 西川祐信筆 全部三巻

付り恋の歩行渡り諸袖のぬれ物 さそふ水に流れのうき身

右三色共、近日日本出し申候間、御しらせのため、此所に書

しるし申候

『咲分色存』は享保三年三月刊、『義経風流鑑』は正徳

五年卯月吉日刊、『好色名取川』は西川絵本である。これ

らのことは、この頃から企画刊行が、何部も併行して順調

に進んで行なわれていることを物語るものであるう。

この例はまた正徳三年九月吉日中嶋刊『西海太平記』一

巻初口にも見られる。

▲扱お断申上まする

井二色里の猫の皮に恐れてよりつかぬ白鼠

全部でたいぞまばん
五巻手代袖算盤

付り小宿の升落しを遁れて夜あるきせぬ内鼠

井二勘当の身に業平の寡所帯は手煎の鍋取公家

女男伊勢風流 全部十六巻

付り頼まれてひかぬ気の有常が娘は勤奉公にみつゝ

井二笹はらをかけらぬ疵を持た足屋の藤永

全部分里艶行脚
五巻分里艶行脚

付り色狂ひの常世は梅桜松を手生の大尽

右三色共、近日日本出来申ゆへ、此所書しるし候

これらのうち『手代袖算盤』は正徳三年九月吉日刊、

『女男伊勢風流』は正徳四年正月刊、『分里艶行脚』は正徳

六年正月吉日刊である。長谷川強氏著『浮世草子考証年表』

(前出)には、「この三書はすべて八文字屋より刊行を見る

から、本書(西海太平記)も八文字屋との協同出版か」と

の指摘があり、八文字屋にあっては経営が順調に延びてい

ることは、ここからも推察できることになる。

国 予告として、「来春早々出し申候、御しらせのため」

ここに記すという類の案内広告。基本的には曰の「追付」

や曰の「近日」を、「来年」「来春」「来月」などと年月の

限定をしたまでに過ぎないが、以下に続くように出版年月

日も定めて予告するという案内広告に定着する初発期のも

のとして立項した。

次の例は、正徳元年十一月江嶋屋刊『寛濶役者片気』巻

末に載るものである。

色三味線作者

肥色遊懐男 全部五冊

井に三ヶ津あらゆる好色目前の楽

右は、正月中に本出し申候、今迄ない図な格、こんたんくだ

き、ちいさき懐の中をかけありき、わづかのちゑ袋から引出

して見れば、三ヶ津の色事、上は奥さま、下は食焼、太夫、

天神、端、つばね、白人、茶屋もの、野郎の内証、花車のや

りくり、役者の手筈、替りし趣向を集、板行仕候、来春、御

覽可被下候
同寄通諸分床軍談 全部六卷
俗諸分床軍談

右之板行、正月に出来仕候

『色遊懷男』は正徳二年正月刊と推定されている。『諸

分床軍談』については前述。『色遊懷男』の案内広告文を

読めば確かに心はときめくことになり、案内効果は充分で

ある。

宝永八年卯月吉日八文字屋刊『傾城禁短気』の巻末には
次の案内広告がある。『情ひな形』は正徳二年新春序刊と
され、『咲分色仔』については前述した。

▲扱お断申上まする

西川祐信筆

傾野情ひな形 五巻

染分情ひな形 五巻
付り恋と色との一重染

并二好色一代託字人

当世御伽曾我 全部八巻

付り風流東鑑
并二母はお針子は色里に

野傾咲分色仔 全部五巻

付り父は他国に子は野郎屋に

右三色共ニ来月本出し申候

因 予告として、「五七日中」、あるいは「三日中」

本を出すので、「御買ひ御覽可被下候」という類の案内広

告。漠然とではあるが、日時を限定するだけに、安心感と

期待感をふくらませることになる。

次の例は正徳六年正月吉日八文字屋刊『分里艶行脚』巻

末に載るものである。
野傾咲分色仔 五巻

付り父は他国に子は野郎屋に

并二母はお針に子は色里に

右の本、五七日中、出し申候

▲又申上まする

并ニ深取ッて浅渡る恋の海の藻刈分別

替り女談合柱 全部三巻

付り陽気の頂上に根も葉もなふて花咲智恵

右は、西川筆好色本、当月中に出し申候

当月中ニ本出来
繪入武徳鎌倉旧記 全部廿五巻
右は馬場信意著述

次の例は享保二年正月（序）八文字屋刊『風傾性野群談』巻末に載るものである。

▲扱お断申上まする

西川ひな形 全部五巻

付り新風替り工夫模様

右の本、二三日中、本出し申候

并ニ陽気の頭上花の咲智恵

好女談合柱 全部三巻

付り深取て浅わたる恋の海

右は、なぐさみる好色本、二三日中、本出し申候

并ニ母はお針に子は色里に

野傾咲分色仔 近日出来五巻

付り父は他国に子は野郎屋に

并ニ二の替りの評判は都の花の露

野傾髪透油 全部五巻

付り難波のよしあしゆい立た江戸元結

右の本、二三日中、出し申候、御買御覽可被下候

各々様

因 予告として、出版日を特定し、「正月二日より、出し置申候」という類の案内広告。

書物が初商いの一商品となつて、毎年正月二日に売り出され、その予告をする源流となるのは、これら八文字屋本

からであろう。

次の例は、正徳三年八文字屋刊『当世御伽曾我』初口に

載るものである。

正徳雛形

全部五巻 大和絵師西川祐信図

并ニ男女立言流新規の替り紋

第一 御所染と屋敷模様は／桜と梅色香ある御物好

第二 町方の模様は色品替る／染分桜木の花のいきかた

第三 一切遊女の模様は流に育／杜若の色ぶかいこのみ

第四 風流の浴衣模様は心の／涼しき夏草の花に寄工夫

第五 地若衆と野郎の模様は／柳の腰付すそ染の思入

右の本、巳ノ正月二日より、出し置申候

この案内広告の特色は、『正徳雛形』は西川絵本で全部五巻、第一から第五巻までの細目を紹介、巳（正徳三年）正月二日から出版する、という広告の必要条件を満たして、購読者に確かな期待を持たせるものである。ここに来て、出版案内広告の基本は確立していると見てよいであろう。この約束の時日「正月二日」が守られない場合、購読者は本屋への信頼を捨てることになり、本屋は許されない約束をしたことになる。

次の例は享保五年正月吉日八文字屋・江嶋屋刊『浮世親仁形氣』巻末に載るものである。

并二 悪縁を結んだ加賀笠の縮緒短い分別

并二 祝言の酒盛り入乱たくれのないの色直し

楠三 三代壮士 正月二日より本出し申候全部五巻

付り 身の怨となる智恵の海底の知れ深い巧
軍法者の極意は生死の時を知らぬ鶏の一声

右は、皆々本出し置申候、跡より、追々、新板出し申候

『楠三代壮士』の刊記は享保五年正月吉日で、これも八文字屋・江嶋屋の相版である。反対に『楠三代壮士』巻末には『浮世親仁形氣』などが載る。

▲扱お断申上まする

并二 抑治承の夏の比よしない手管と扇子の芝

親も知ぬ万両の不足金は色里へ横の嶋

風流宇治頼政 正月二日より本出し置申候全部五巻

一度は日の出の家色に曇る朝日山

付り 宝剣の威光は黄金増る山吹の瀬

并二 若い時の無分別脱にくい腕の入黒痣

願ひ入た五升樽打明しの後世友達

浮世親仁形氣 正月二日より本出し置申候全部五巻

付り 六十の手習色派の手本揚屋の礎破り

年々始末二花の咲た老後の世盛

并二 芸子の紋をつけざしの盃一つ呑で指枕

異国もおよばぬ指先の曲顔に桜の花枕

役者枕がへし 正月二日より本出し置申候全部三巻

付り 和国の恋はしめあふて心を知らずお手枕
略形の紋を付文さままいる身揚げに気を張枕

右のうち『風流宇治頼政』も享保五年正月吉日八文字屋・

江嶋屋相版である。

つまり、『浮世親仁形氣』『楠三代壮士』『風流宇治頼政』はともに享保五年正月吉日刊で、それぞれ連環させながら案内広告をしていることがわかる。そしてこの連環形式は、時間的な連環形式ともなり、出版経営が活発になっていく今後の定形となる。

もう一つ、元文四年正月吉日八文字屋刊のことで記せば次のようになる。『武遊双級巴』の巻末には次の案内広告を載せている。

▲皆様へお断申上ます

与作は馬追伊達にはね廻る丹波一國の筋男

三吉は自然著うなぎに成おふせた播磨の家老男

丹波与作無間鐘 全部五巻

しげの井は見付けても包緑の陳幕心底の深い貞節女

小まんは撞当た無間の契約おもひを関の留女

右の本、当正月二日より、本出し置申候間、御買御求、御覽

可被下候 以上

広告の『丹波与作無間鐘』四巻末には『武遊双級巴』、一方で『花樗嫩柳嶋』一巻末には『丹波与作無間鐘』、五巻末には『武遊双級巴』をそれぞれ案内広告して、元文四年正月吉日（二日）刊の三作で連環させて広告しているのである。

そしてここでもっとも注意すべきことは、「本出し置申候間、御買御求御覽可被下候」ということであろう。ここからも出版経営が前面に押し出されてきていることが明らかに読み取れる。

このことは、さらに時代が下ると、「右者、新板ひらかな衆入のよみ本^二而御座候」となつて、読み易さを強調するようにもなる。この例は宝曆四年（一七五四）正月刊『浮世親仁氣後編世間長者容気』四巻末に案内広告する『菜花金夢合』（同五年正月刊）、同巻末の『頼政現在鶴』（同）、また『菜花金夢合』巻末に案内広告する『頼政現在鶴』、『御伽太平記』一巻末に案内広告する『中将姫誓系遊』（宝曆六年正月吉日刊）などにも見られることである。

さらに加えて言えば、時日正月二日を強調して、「正月二日より、無違、本出し申候付、又々書のせ、御知らせ申上候、其節は御求、御覽奉頼上候」（宝曆二年正月刊『夕霧有馬松』所載『絵本雪月花』の案内広告）という類

もある。

四 予告として、続き物であるから、全部揃えて御買ひ方を頼みます、という案内広告の類。

次の例は正徳三年正月八文字屋刊『当世御伽曾我』一巻一丁末に載る案内広告である。すなわち、『当世御伽曾我』は正徳三年「巳ノ正月二日より本出し」、後の五巻は「巳ノ二月朔日より本出し」といい、目録内容も示して全部十巻とするというものである。

当世御伽曾我 十巻惣目録

付り好色一代証牢人誓紙の接紙子
曾我の先祖遺恨の根元 伊東祐親

一之巻 工藤祐経六原にて所領双論之事

二之巻 十郎五郎が母出所。京ノ小次良が実父。鬼王団三郎が来由。河津保野相撲并ニ祐泰近江八幡討るゝ事

三之巻 河津が後家曾我へ改嫁の因縁并ニ大磯の虎が父母系図。同虎と祐成縁を結ぶ始りの事

四之巻 飯粧坂の少将出所。箱王丸還俗の旨趣
同少将と恋暮并ニ母の勘気を蒙ること

五之巻 和田ノ義盛方便の大酒盛并ニ祐経が娘白菊
男躰並ニ廓通ひ。虎と十郎と心中の真を尽すこと

右、是迄五巻、巳ノ正月二日より、本出し置申候

御伽曾我 風流東鑑

付り忠孝倭奸二筋の繩、心のいましめ

三浦ノ与市犬房丸大磯にて傍若無人の行跡

六之巻

仁田ノ四郎思慮をめぐらし

曾我兄弟が難義を救ふこと

本田次郎重忠の命によつて計略の色狂ひ。

七之巻

草摺引井二の宮ノ姉方便五郎が

勘気を免さずること

八之巻

手越の龜菊時宗二言の契約。兄弟年来の

敵討が大藤内兼而の意趣にてきらるゝこと

九之巻

柄柄ノ平太女に似せ御所五郎丸を討取遺恨の謂

大藤内が子藤内太夫曾我の余類へ怨をむすぶ事

十之巻

禅師坊箱根の別当ノ身に替て切腹。大房丸遠流

曾我兄弟富士野に青面荒神といはるゝ事

合十巻也

後の五巻『風流東鑑』は正徳三年二月二日に出で、『当

世御伽曾我風流東鑑』六巻一ウに次のように案内広告が

ある。

▲扱お断を申上ます

一 当世御伽曾我 十巻

右の本、久々延引申候、此度も、板木出来かね申付て、先

五巻、正月二日より本出し、御目かけ申候、残り五巻、此比

出来申候間、則

御伽曾我風流東鑑と、けだいを仕り、後五巻、此度出し申、

是にて、都合十巻にて御座候、本合申やう、表紙も一色、

たし申候、当五月迄、初五巻、後五巻、どれ成共御買下さ

れ、十巻都合なされ、置下さるべく候、五月過候ては十

巻仕り、はなして、五巻は売申さず候、それゆへ、御断申上

候

これは、初五巻、後五巻、ともに表紙を一色にして出し

たので、それぞれ買い求めて十巻で揃えて欲しい。五月過

ぎると十巻で売り、離して五巻ずつには売らぬと丁寧に断つ

たもので、セット売りの利得を目論んだものである。

続き物としての出版を見ていくと、正徳四年正月八文字

屋刊『女男伊勢風流』の後の巻『愛敬昔色好』は同四年三

月吉日同刊である。そのことは『愛敬昔色好』下巻末に次

のようにある。

伊勢風流、初三巻、正月二日より出し置申候、愛敬昔色好、

三巻、此度出し、是二都合六巻也

また、正徳五年冬江嶋屋刊『世間子息気質』五巻末には、

「追加 世間娘氣質 全部五卷／右は来甲（申＝享保元年）正月二日より本出し候間、御求御らん可被下候」と案内広告を出している。『世間娘氣質』の実際の刊行は享保二年八月であるが、その案内広告は享保二年五月吉辰洛陽書林刊『国姓爺明朝太平記』に次のようにある。

世間子息氣質 作者其碩

追加 世間娘氣質 全部 五卷 同作

右之本、近日出来仕候間、御求御覽可被下候

さらに言えば、その『世間娘氣質』の内題下には「子息氣質追加」とある。

享保四年正月吉旦鶴屋・八幡屋・菊屋刊『義経倭軍談』にも後の巻『花実義経記』（享保五年正月吉日、同三軒刊）の案内広告をしている。

前 義経倭軍談 全部十二卷

右の、初巻六冊、牛若丸、鞍馬、奥州下向迄の間を、

載ス

後 花実義経記

右、後六冊、判官八嶋乱、高館合戦之間ヲ、載ス

続き物として、後の巻をその目録とともに案内広告する例は多い。それは評判の作に追従しようとするものである。もう一、二例をつけ加えることにする。

『忠見兼盛彩色歌相撲』（延享四年正月吉日八文字屋刊）

には「傾城禁短気之後編／契情花月論／追付出来／全部六巻／附り女若二色の袈裟掛の法談」が目録内容とともに載せられ、また同じ形式で延享四年正月吉日八文字屋刊『物部守屋錦輩』にも載せてある。この『契情花月論』は明和二年（一七六五）正月吉日山野孫兵衛刊『禁短気次編』、同『同三編』のことで推定されている（『浮世草子考証年表』前出）。

『歳徳五葉松』（宝暦三年正月吉日八文字屋刊）には「親仁形気（享保五年正月初版）後編／世間長者容気／近々出来／全五冊」の案内広告があり、最後に「右者、故自笑、書残したるを綴立、追付出し申候ニ付、此度ちよと書し、御目かけ申候、出来之節者、御求、御覽奉願上候」とある。そして、宝暦四年正月吉日八文字屋刊『世間長者容気』の内題は『浮世親仁形気後編世間長者容気』である。

因 因と関連して、二本、三本を同時に出すので、「御買御覽」を頼むという案内広告の類。

享保六年正月吉日八文字屋刊『女曾我兄弟鑑』巻末には次の案内広告がある。

扱お断申上まする

遊色床春駒 西川筆全部三巻

付り陰陽の手綱引しめた聞の曲乗

寝繁伽羅枕 全部三巻 此二色なくさみ絵也 正月二日より出し置申候

付り悦びの泪気はづいた色床

日本契情始 全部五卷

付り色里の三番叟嶋の千歳は白拍子の口明

けいせい哥三味線 全部十六卷

付り調子につて女郎の手管ばなし

百人女郎品定

西川筆御たしなみ草紙仕候
右三色は正月申出し申候

『日本契情始』は享保六年三月吉日江嶋屋・八文字屋刊、
『けいせい哥三味線』は遅れて享保十七年三月吉日八文字
屋刊である。

『百人女郎品定』については、さらに正徳五年卯月吉日
八文字屋刊『義経風流鑑』巻末に、挿図入りで次の案内広
告もしている。これはさらに同六年正月吉日刊の『分里艶
行脚』巻末にも載せられている。

▲初お断申上まする
井二花奢育の息女は附子の鶯笛



付り風流造の遊女は実生の禿菊

右は、一切女中の風俗、有職、世俗、故事、因縁、当世、古
風^{うふう}のわかちを、文談^{もんだん}仕り、尤さしいいなし、西川筆^{せいかんひつ}、御た
しなみ草紙^{くさし}にいたし、追付出し申ゆへ、御しらせのため、書
印申候

正徳五年 卯月吉日

各々様

八文字屋八左衛門

享保十四年正月吉日八文字屋刊『御伽平家』の巻末には
「御伽平家後の巻／風流扇軍 全部五卷／右之本、一所に
出し置申候間、御求御らん可被下候」とある。この例も多
く、『けいせい哥三味線』四巻末には、「初巻 職太平記
全部五巻」と「後巻 樟軍法鑑 桜 全部五巻」の「二色
共正月二日より本出し」ておいたので御求め下さい、な
どとするものである。案内広告の二本は、ともに享保十七
年正月吉日八文字屋刊である。

田 役者評判記、西川筆絵本など、八文字屋出版物類の
案内広告。

西川筆絵本類の案内広告については、案内広告の例示資
料にも当初から出しているが、特に囚などから明らかにな
ることではあるが、改めて掲出してみることにする。次の
例は『分里艶行脚』三巻末に載る『役者願紐解』（享保元
年）である。

▲毎年御嘉例に出します評判/外題

井二銀の緒に取つて相替らず大夫元

役者願細解 全部三巻

付り十二燈の光をかきたてた極り番付

第一 八坂の庚申へ 都の花代まいり

付り御垂跡は青面金剛と成つて子共宿の守本尊

第二 浅草の観音へ 武蔵野、月まいり

付り御誓願は三十三身に略て丹前男の守本尊

第三 勝曼の愛染へ 難波の洗声まいり

付り御相好は方便の弓矢取つて実悪仕の守本尊

右は、申ノ年大評判、三ヶの津芝居、不残揃、本出し申候間、

外より評判本出し候共、御見合せ被下、此方の本ヲ御ぎんみ

被成、御買頼上候 以上

各々様

八文字屋八左衛門

次は寛延二年（一七四九）正月吉日八文字屋刊『花楓劍

本地』四巻末に載る『古今役者大全』の案内広告である。

その内容案内は極めて詳細で、出版の意気込みは十分に汲

み取ることができる。

花やかな女形は次第に立身の大評判
鳥に鶯あり翅の広き立役の取沙汰

津ヶ三 古今役者大全

井二 風切の切かわりし仕内に誉あり実悪の噂
月とも潮ともなき突調声は敵役の風聞

右は、三ヶ津を、一つらねにいたし、根生、新参の差別なく、

全躰の上手、中手をわかち、仕打の評を、鏡にかけたること

くに仕立、扱芝居の由来、役者のはじまり迄書入、今の役者

を、昔の役者に引くらべ、凡、十ヶ年に一度ほどづゝも、改

候様に考へ、板行仕候、此本を根に被成、顔見せ、二ノ替り

の、当分のあたり、ふあたりに、御引合せ被下候へば、古今

の評判、明に見へ申候、追付、板行仕候と、先達而申上候へ

共、明細に念入申付、今ししばらく、延引可仕候間、左様ニ思

召可被下候、猶、本出し申候節は、御求メ、御覧可被下候

これは寛延三年三月に版行され、『優源平哥袋』（寛延四

年正月吉日八文字屋刊）『道成寺岐柳』（同上）などに六巻

目までの内容紹介をしている。口上も若干異なる。

三ヶ津津新撰古今役者大全 撰者具笑 全部六巻

初巻は役者芝居敷始りをしるす 二巻目は三ヶ津立役の評をしるす

三巻目は三ヶ津 花車形の評をしるす

四巻目は同若女形若衆形の評をしるす

五巻目は同役者故実を委しるす 六巻目は同物役者の系図を委しるす

右者、去年ノ三月に、本出し置申候、御求め、御覽奉頼上候、

尤、先達而、書しるし、御知らせ申上候通、三ヶ津を、一つらねに致し、根生、新参の差別なく、全躰之上手、中手、其外共に三段をわかち、仕打の評を、鏡にかけたごとくに仕立、石に書しるし候通、すべての由来を委く、昔の役者より、今の役者へわたり、つぶさに書あらはし申候へば、毎年出申候顔見せ、二の替、評判之当り、ふあたりを御引合、御覽被下候へば、古今の評判、明に見え申候、此うへの上り、下りは、十ヶ年に一度づゝ、相改申候、兼而、左様に御心得被遊可被下候、已上

宝曆七年正月吉日八文字屋刊『花色紙襲詞』三卷末には『役者芸品定秘抄 耳塵集 全部一卷』の案内広告をし、これは「古今役者大全」に載せておいた「優家七部書の内

の一部」という。宝曆十三年正月吉日八文字屋刊『風流庭訓往来』四卷末には「古今役者大全後編 芸品定大備ノ新改役者綱目 全部」の案内広告があり、明和九年（一七七二）正月吉日八文字屋刊『遺放三番続』一卷末には『物真似 鸚鵡石 全一冊』『役者発句占 全三冊』とともに『狂言尽 鸚鵡石 全一冊』『役者発句占 全三冊』とともに、このたび本を出したので、御求御覽下さい、と頼み上げています。

絵本の案内広告については、西川祐信筆を前面に押し出すのであるが、延享三年正月吉日八文字屋刊『勸進能舞台

桜』一卷末には次のようにある。

扱御断申上まする

絵本西川東童 全部三冊

右之本は、正月より、十二月迄之年中行事を、子供遊取組哥、発句などを入、面白く、西川氏之筆にちりばめ、絵本仕、本出し置申候間、御求可被下候

延享五年正月吉日八文字屋刊『盛久側柏葉』二卷末にも次のようにある。

扱御断申上まする

絵本花の鏡 全部三巻

右は、掛物、屏風、襖、衝立の絵を、題に取合せ、西川氏の筆和らげ、ゑ本に取組申候、則、本は正月二日より出し置申候、御求御覽可被下候

この種の西川筆絵本の案内広告は、前後にわたり、長く続いている。

時代が下るほど出版種類も広がり、広宏案内も詳細になっているが、特色のあるものを列挙してみることにしよう。

宝曆九年正月吉日八文字屋刊『契情蓬萊山』は、案内広告の多い本であり、内容も実に詳細である。

まず二卷末には次の案内広告がある。

●此所に書しるし御しらせ申上候

都名所手引案内 懐中本全部一冊

神社、仏閣、開基、来由、縁起、社領、寺領、神事、法
会、名所、旧跡、方角、名産物、四季詠覧、旅人止宿所
家名、洛中洛外細見、京町鑑等 至迄 委 集之

右之類書、世間に数多ありといへ共、或は洩れ、又は通俗仕
がたし、よつて、今こゝに記したるは、協書の通、委細に書
のせ、見分やすきやうに仕、あらたに、当春より、本出し申
候、御もとめ、御覽奉願上候、已上

三卷末には次の案内広告がある。

●此所に書しるし申上候

京町鑑 懷中本全部一冊

縦横、町小路、通筋、古名、西陣、聚楽、上京、下京、
古町、新町、細町分、洛中、洛外、寺社、方角、古今由
来、祇園会山鉾出町々、七日十四日差別、御大名御屋鋪
附、并呉服所、家名所附、名物、名産、諸商店々所、
町々小名、辻子、新地、等 至迄 委 記、見分安 便
右之本、当春より、出し置申候、御もとめ、御覽奉願上候、
已上

四卷末には次の案内広告がある。

怡顔齋松岡玄達先生撰

林 道春説

桜品 那波道円譜 合考 全部一冊

山崎闇齋弁

本文を、ひらかなになをし、悉、花形を模写し、数品のさく
らを、見分やすく詳にす

右之本、先達而出し置申候、御求御覽可被下候

五卷末には「読本目録」が二丁分あり、『今川一睡記
五冊』から『南木秀日記 五冊』まで、一〇八点が掲出さ
れている。これは既刊目録で、本屋、貸本屋向けの対応と
思われること、前述の通りである。

宝曆十年正月吉日八文字屋刊『今昔九重桜』三卷末には
『都名所手引案内／ひらかな多ゑり全一冊』『京町鑑 全一
冊』のほか、新しく「怡顔齋松岡玄達成章先生撰梅品 全部二
巻」を出して、「悉、花形模写、数品、梅見分安便ス」
と案内、御求め御覽を頼み上げている。

宝曆十一年正月吉日八文字屋刊『哥行脚懷硯』も案内広
告の多い本である。

三卷末には「三ヶ津芸品定かぶきじし 全部五巻」の各巻
の内容目録を紹介して、午(十二年)春より売り出しを予告

し、四卷末には「梅品 全部二冊」「桜品 全部一冊」「都
名所手引案内 懷中本 全部一冊」の版行出来のことを案

内広告し、五卷末には「京町鑑 全一冊」、
絵図 折本全部一摺、『京都本願寺大絵図 折本全部一冊』
の版行出来を告げて、御求め御覽下さいと言つ。さらに五

卷末には「読本目録」(「契情蓬萊山」掲載分と同じ)が二

丁分一〇八点が掲出されている。

これらの案内広告は、掲出書名が取り替えられたりしながら、後にも続くことになる。

江戸、中、後期約八十年間にわたって出版された大衆娯楽読物、いわゆる八文字屋本と称さる浮世草子について、その案内広告の実際から、浮世草子の普及や経営努力を探ってみたのであるが、事は複雑に絡んでいることがみえてきただけであり、一面を掻い撫でしてみたまでになった。但し、本が商品として作られ、案内広告され、その案内広告の方法も、売り捌きを目的にして、着実に発展していることだけは窺えたと思う。

